

主題：神の王国の実際の中に生きる

メッセージ 11

召会を建造するための王国の訓練

聖書：マタイ 16:16-18, 21-28

I. マタイ第16章において、召会を建造する道と建造の敵が啓示されています：

- A. 生ける神の子であるキリストは、岩としてのご自身の上に、造り変えられた人であるペテロのような石をもって、召会を建造します—— 16-18 節。
- B. ハデス [陰府] の門、サタンの権威や暗やみの勢力は、召会を攻撃して主を妨げ、召会を建造させないようにしています—— 18 節。
- C. 召会を建造するために、主は死を経過し、復活の中へと入らなければなりません—— 21 節：
 - 1. 召会はキリストの死と復活を通して生み出されました——ヨハネ 12:24。
 - 2. 召会を建造する道は、十字架につけられ復活することです——参照、II コリント 4:10-12. ガラテヤ 2:20。
 - 3. 召会は、十字架を通しての復活の領域においてのみ存在し、建造されます——創 2:21-22. 参照、エペソ 4:15-16。
- D. ペテロは、良い心をもって、主をいさめ、主がエルサレムに行って十字架につけられることを阻止しようとしてしました——マタイ 16:22：
 - 1. ハデス [陰府] の門の一つから出て来たのは、ペテロではなくサタンでした。その門はペテロの自己の門であり、主を妨げて召会を建造させないようにしました—— 23 節。
 - 2. 自己と魂の命は主要な門であり、サタンはそれらの門から出て来て召会を攻撃し破壊します—— 23-26 節。

II. 召会の建造は、三つのかぎを行使することによって、ハデス [陰府] の門を閉じることにかかっています——24-26節：

- A. わたしたちは自己を否むというかぎを行使することを学ぶ必要があります—— 24 節：
 - 1. 肉は、創造された体が罪（サタンの性質）によって腐敗させられたものです（ローマ 6:12, 14. 7:8, 11, 17, 20）。自己は、創造された魂にサタンの思いを加えたものです。
 - 2. サタンの思い、考えが人の魂の中へと注入されたとき、人の魂は自己、サタンの具体化となりました——創 3:1-6. マタイ 16:22-23：
 - a. エバが善悪知識の木の実を彼女の体の中へと取り入れる前に、サタンの考え、思いは彼女の魂の中へと注入されました。
 - b. エバの思いがサタンの考えによって毒された後、彼女の感情は刺激され、そして彼女の意志は活用されて知識の木の実を食べることを決定しました。
 - c. この時までには、魂のあらゆる部分は、すなわち、思い、感情、意志は、毒されていました。

- d. 自己は魂の命の具体化です。魂の命は思いを通して表現されます。こういうわけで、自己、魂の命、思いは、三一です。
 - e. これらの三つの背後にはサタンがおり、サタンは自己を操作して召会を破壊します—— 23 節。
3. 自己は、神からの独立を宣言する魂です：
- a. 主が重んじるのは、わたしたちが何を行なうかではありません。そうではなく、主が重んじるのは、わたしたちが彼に依存することです—— 7:21-23. 参照、ヨシュア 9:14。
 - b. からだの敵は自己です。自己は独立しているものなので、自己はからだの建造にとって最大の問題であり、最大の妨げまた反対です：
 - (1) わたしたちは神に依り頼むだけでなく、からだにも、すなわち兄弟姉妹にも依り頼むべきです——出 17:11-13. 使徒 9:25. II コリント 11:33。
 - (2) 主とからだは一です。ですから、もしわたしたちがからだに依り頼んでいるなら、主にも依り頼んでいます。そしてもしわたしたちがからだから独立しているなら、自然に主からも独立しています。
 - (3) わたしたちが依り頼んでいるとき、自己はなくなります。そしてわたしたちは自己ではなく主の臨在を持ち、平安に満ちます。
 - (4) 自己の命が極みまで十字架によって対処されてはじめて、わたしたちはキリストのからだの実際に触れることができ、からだを認識できるようになります。
4. 以下の点は、自己のいくつかの表現です（参照、詩歌 628 番の 5 節と 6 節）：
- a. 自己には、野心と高ぶりと自己高揚があります——マタイ 20:20-28. I ペテロ 5:5. ローマ 12:3. 民 12:1-10. 16:1-3. ピリピ 2:3-4。
 - b. 自己には、自分の義、自己義認があり、人を暴露し、人を批判し、人を罪定めします——マタイ 9:10-13. ルカ 18:9-14. I ペテロ 4:8. ヨハネ 3:17. 8:11. ルカ 6:37. マタイ 7:1-5。
 - c. 自己には、自省と自分を軽んじることがあります——雅歌 2:8-9. I コリント 12:15-16。
 - d. わたしたちは自己の中にいるとき、召会や導いている人や聖徒たちに腹を立てる可能性があります——マタイ 6:14-15. 18:21-35. マルコ 11:25-26. コロサイ 3:13。
 - e. 自己には、失望と落胆があります——参照、ローマ 8:28-29. II コリント 4:1。
 - f. 自己には、自己愛、自己保護、自己追求、自己憐憫があります——マタイ 13:5, 20-21。
 - g. 自己には、つぶやきと議論があります——出 16:1-9. ピリピ 2:14。
 - h. 自己には、天然の味わいと好みに基づいた愛情（友情）があります——マタイ 12:46-50. ピリピ 2:2 後半. I コリント 12:25。
 - i. 自己には、意見を述べ、異議を唱える事柄があります——ヨハネ 11:21, 23-28, 39. 使徒 15:35-39. 参照、I コリント 7:25, 40。
 - j. わたしたちは自己の中にいるとき、個人主義的で単独的です—— 16:12。

5. わたしたちが自己を否むというかぎを行使して自己を閉じ込めるなら、わたしたちが腹を立てるのは不可能になるでしょう。腹を立てない者は幸いです——参照、ルカ 23:34. 使徒 7:60 :
 - a. もしわたしたちが腹を立てることがあるなら、それはわたしたちが自己に満ちている証拠です。
 - b. もしわたしの自己が閉じ込められているなら、あなたがわたしに何をしても、あなたがわたしをどのように扱ったとしても、わたしは腹を立てないでしょう——ルカ 23:34. 使徒 7:60。
6. わたしたちは自己を否むというかぎを行使して、あらゆる状況において自己を閉じ込めることを学ぶ必要があります :
 - a. 状況があなたにとって良くて悪くても、兄弟たちがあなたを愛しても憎んでも、あなたは自己を閉じ込めなければなりません——Ⅱ コリント 12:15。
 - b. もし自己が閉じ込められているなら、召会は建造されます。
- B. わたしたちは十字架を負うというかぎを行使することを学ぶ必要があります——マタイ 16:24 :
 1. 十字架を負うことはただ、神のみこころと負うことを意味します。十字架は神のみこころです—— 26:39. ヨハネ 18:11 :
 - a. 主イエスは犯罪者のように十字架に行くことを強いられたではありません。主は進んで十字架に行きました。なぜなら、十字架は神のみこころであったからです——マタイ 26:39。
 - b. 主イエスは進んで十字架につけられました。それは、彼の死を通して、彼の命が解放されて、召会を生み出し、建造するためでした——ヨハネ 12:24。
 - c. 十字架は主にとって大きな苦難でしたが、主の関心は苦難にあったのではなく、神の定められた御旨の成就にありました——ヘブル 12:2. コロサイ 1:24。
 2. 「自分の十字架を負い……なさい (Let him … take up his cross)」(マタイ 16:24) は、わたしたちが強いられて十字架を負うのではなく、進んで十字架を負うことを意味します :
 - a. わたしたちの夫、妻、子供たちは神のみこころであり、それゆえわたしたちの十字架です。
 - b. 一つ召会は神のみこころであり、召会の中のあらゆる兄弟姉妹は神のみこころです。こういうわけで、十字架を負うことは、召会を負うことであり、またすべての聖徒たちを負うことです。それは、わたしたちが真の一を持つためです——ヨハネ 17:21-23. エペソ 4:3, 13. I コリント 1:10. ペリピ 2:2。
 3. わたしたちは自分の十字架を負うだけでなく、自分の十字架を担う必要があります。すなわち、十字架にとどまり、自分の古い人を日ごとに十字架の終結の下に保つ必要があります——ルカ 14:27. ローマ 6:6. ガラテヤ 2:20. ペリピ 3:10. I コリント 15:31 :
 - a. わたしたちは主の十字架を通して神聖な命を受けました。今や、この命の中で建て上げられるために、わたしたちは進んで喜んで十字架を負う必要があります。

- b. わたしたちは自分の味わいや感覚や意識を顧みるべきではなく、むしろ神のみこころだけを、すなわち、わたしたちが真の一を持つことだけを顧みるべきです——ヨハネ 17:21-23. エペソ 4:3, 13. I コリント 1:10. ピリピ 2:2。
- C. わたしたちは魂の命を失うというかぎを行使することを学ぶ必要があります——マタイ 16:25 :
1. 魂の命を救うとは、魂にその享受を得させることによって自己を喜ばせることです。魂の命を失うとは、魂の享受を失うことです：
 - a. 神は人を魂として創造し（創 2:7）、享受に対する必要を持たせました。
 - b. 人の霊の中へと神を受け入れ、魂を通して神を表現することは、人の喜びであり、楽しみであるべきです——参照、ネヘミヤ 8:10. ローマ 14:17。
 - c. 主イエスは、この時代に彼の魂の享受を失いました。それは、彼が来たるべき時代に彼の魂を見いだすためでした（ヨハネ 10:11. イザヤ 53:12）。わたしたちは同じ事をしなければなりません（ヨハネ 12:24-26）。
 - d. もしわたしたちがこの時代に自分の魂の命を救うなら、来たるべき時代にそれを失います。しかし、もしわたしたちがこの時代に自分の魂の命を失うなら、来たるべき時代にそれを見いだします——マタイ 16:25。
 - e. わたしたちは主イエスを愛し、自分の魂の命を憎み否む必要があります、死に至るまでも自分の魂の命を愛さない必要があります——I コリント 16:22. 2:9. ルカ 14:26. 9:23. 啓 12:11。
 2. もしわたしたちが主のために、召会のために、すべての聖徒のために、自分の現在の魂の享受をすべて進んで失うなら、他の人たちはわたしたちによって養われ、わたしたちを通して建造されます。これは苦難ではなく喜びです。
 3. 王国の実現の時に、王の喜びあずかって地を支配するという王国の褒賞は、わたしたちがこの時代に自分の魂の命を救うか、それとも失うかどうかにかかっています——マタイ 16:25-28. 25:21, 23。